九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

学校教育研究における儀礼論的接近 : 若干のレヴューと展望

坂元, 一光
九州大学大学院人間環境学研究院国際教育環境学講座 : 助教授 : 教育人類学

https://doi.org/10.15017/994

出版情報：大学院教育学研究紀要. 4, pp.159-172, 2002-03-25. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院教育学研究紀要，2001，第4号(通巻第47集)，159－172
Res. Bull. Education., Kyushu U., 2001, Vol.4, 159－172

学校教育研究における儀礼論的接近

――若干のレヴューと展望――

坂　元　一　光

はじめに

小論では，これまでの教育の人類学あるいは社会学的研究において，学校教育をめぐる儀礼的な実践に着目した分析事例を若干の研究史の中にたどりつつ，儀礼的領域あるいは儀礼論的視点をとおして教育現象に接近する際の具体的方法や意義について検討する。今日，教育現象への儀礼論的接近の方法はとりたてて盛んとはいいがたい。かつて，イニシエーション儀礼をいわゆる「未開社会」における制度的教育の一形態として積極的に取り上げていた教育人類学においても，その主たる研究対象が産業社会の定型的教育すなわち学校教育へと焦点化される過程のなかで，かつてのような儀礼論的接近方法はかげをひそめつつあるように思われる。しかし，教育研究における儀礼論の視点が，今日，まったく閉ざされているわけではない。教育研究への人類学的，社会学的儀礼論の応用は，一部の研究者の間では，有効性と可能性を秘めたひとつの確かな分析視点として今なお注目されつづけている(Ensign & Quantz 1997: 217-219, Mclaren 1999(1986), Musgrove 1982: 151-157)。以下の部分では教育研究における今日までの儀礼論の試みを，特に学校教育に対象を限定しつつ若干の検討を行なうものである。

1．学校儀礼の類型と分析理論

学校教育の場において現出する儀礼現象の分析に関しては，最近の研究動向から見るとき，その学校生活の場面における現れ方によってゆるやかな二つのカテゴリーとして対象化されるように思われる。ひとつは顕在的な集団的行為としての「大きな儀礼」(large, formal ceremony) であり，もうひとつは潜在的で相互対面的な行為としての「小さな儀礼」(small rituals, interaction rituals) である[(1)]。前者は学校独自の時間と空間を生み出す集団的・形式的な行為としての儀式や行事を指している。この中には全校的あるいは学級ごとの定期的集会，すなわち入学式や卒業式，授業の始まりと終わりの儀式，体育祭や文化祭，各種の校内コンテストなどの全校行事，さらには生徒たちに課される「試験」[(2)]などもこの大きな儀礼に内包される。「大きな儀礼」は年々歳々あるいは毎日の学校生活の中で繰り返され，集団参加と行動の形式性によって顕在化される事象である。これらの儀礼カテゴリーは，人類学的にはいわゆる「通過儀礼」(ヘネップ) あるいは「強化儀礼」(チャップル・クーン) に相当するものである。

これに対して，日常的な校内生活を中心に潜在的で相互対面的な状況において現出すると考えられる「小さな儀礼」は，いわゆるゴッフマンの「相互行為儀礼」をその典型とする（Magolda 2000:34）。ゴッフマンによれば，人々による対面状況は，そこに共在する人々が状況にふさわしいふるまいをすることによって維持される。さらに，状況にふさわしい相互行為は，人々が場や状況にふさわしくあるための「配慮」（敬意とふるまい）によって支えられており，そうしたひとつの道徳的な要請を保証しているのが「相互行為儀礼」なのである（ゴッフマン　1986）。このように「相互行為儀礼」は，先の顕在的・集団的儀礼とは異なり，日常的な生活場面を「つぶさに」凝視することによってはじめて対象化されうる潜在的でミクロな儀礼である。

これまでの学校教育研究における儀礼論的接近は，人類学および社会学の顕著な業績の上にすすめられてきた。人類学（民族学）領域では，時・空間や社会的地位の移行に際して行われる諸儀礼を通過儀礼として一般化したファン・ヘネップの業績（ヘネップ　1977）およびヘネップの通過儀礼の過渡の状態（リミナリティ）の中からコミュニタスの概念を発展させ，さらには分離・過渡・統合という三段階図式から，社会を過程として見る「社会劇」の方法的概念を展開したV. ターナーの研究（ターナー　1976，1981）があげられる。一方，社会学領域においては儀礼の果たす役割を社会の維持や統合との関係で機能主義的に捉えたデュルケームおよびその継承者たち，特にデュルケームの儀礼論（デュルケーム　1975）を日常生活世界において新たに解釈し直おそうとしたゴッフマンの仕事などがあげられよう[3]。

管見するところ，以下で紹介する学校教育への儀礼論の今日的接近には，主としてヘネップを嚆矢とする通過儀礼論を応用的，発展的に継承するターナーの動態的儀礼論の方向性と，新しい観点でデュルケームを継承し人間の対面的場面での相互的な秩序形成に注目したゴッフマンによる儀礼的行為論を分析概念に利用する方向性の二つの流れが共在しているように思われる。

2．学校教育とイニシエーション儀礼

人類学的教育研究が古くから注目する儀礼場面といえば，いわゆる「未開社会」におけるイニシエーション儀礼がまず想起される。教育人類学という領域が応用人類学の一部門として制度的に形をととのえる以前から，イニシエーション儀礼の教育的機能に対しては，すでに強い関心が向けられていた。なかでもアフリカ研究のワトキンスは，早い時期からイニシエーション儀礼とその組織基盤としての秘密結社（secret society）を近代的学校教育とのアナロジーにおいて捉え，「未開社会」には教育が存在しないといった欧米の学校中心主義的な教育観を相対化することに貢献した（江渕　1982：170）。そして，このようにイニシエーション組織と近代学校をアナロジカルに対置させて検討することは，文化伝達の制度や慣習の多様性への認識を前提とする教育人類学におけるいわゆる「文化化論」の枠組みにそって進められていくことになる[4]。

ワトキンスは西アフリカのマンディンゴ語圏地域に広く分布する秘密結社の形態を，若者の訓練を目的に制度化されたひとつの教育機関として「ブッシュ・スクール（Bush School）」と呼んだ（Watkins 1963(1943)）。この地域にはメンデ，バイ，クペレ，クリマ，ゴラ等の諸部族が居住し，一般

に男子の場合はポロ，女子の場合はボンドと呼ばれる秘密結社が存在している。ワトキンスは，主としてバイ（Vai）族の事例によって，この地域の青少年に対し大人の資格を得るために行われる儀礼的・集団的訓練の様子を記述している。バイ族の間では，そうした訓練を行なう男性の組織を「ベリ(beli)」，女子のためのそれは「ボンド（bondo)」と呼ぶ。ワトキンスはこれらの秘密結社組織に見出される特徴である1.日常的生活圏（家族）からの隔離，2.組織化された集団生活，3.具体的な教育目標，4.体系化された訓練方法や訓練内容，の諸点に着目することによって，西欧近代の学校教育と部族社会におけるイニシエーション組織とのあいだに制度的な共通項を見いだし，制度化された若者の教育機関として「ブッシュ・スクール（Bush School)」の名称で呼んだ。(Watkins 1963(1943))。

「ベリ」や「ボンド」の訓練は，日常の生活圏である近隣・家族から離れた林の中に専用の建物を建てることから始まる。男子の施設は数マイル四方の土地を使って大規模に設営される。女子の「ブッシュ・スクール」はそれより狭く，木と泥で造られた塀によって囲まれ水浴のできる川の近くを選んで設営される。いずれも異性やイニシエートされていない者，家族あるいは他所の人間が近寄ったり入ったりすることを厳しく禁じている。

バイの「ブッシュ・スクール」の訓練では，男女それぞれ年長者の特別なリーダーおよびその助手たちによって主導されながら，ともに身体的な成長とヴァイの文化や生活の基本知識・技術等の習得が目指される。訓練のための期間は地域あるいは部族により多様であるが，バイ族の場合，男子は18ヶ月，女子は12ヶ月ほどの期間が報告されている。ただ，ヨーロッパ文化の浸透につれて新しい知識の需要に応えた近代学校の普及もあり，その期間は次第に短期化する傾向にあったという。

「ブッシュ・スクール」において訓練される内容は多岐にわたっていて，男女によって内容も異なる。男子の「ベリ」においては，年齢や個々の素質・関心によって小さなグループに分けられ訓練を受ける。絵画，工芸，部族伝承，戦闘，カヌー，狩猟，あるいはダンス，歌，楽器の演奏など多彩である。女子の「ボンド」では，特にヴァイ族の女性あるいは母や妻として身に付けるべき身体装飾，無毒なキノコの採取，料理，子育て，刺繍，糸紡ぎ，歌やダンスなどの知識や技術が訓練される。これらの訓練期間を終えるときには盛大な儀礼と宴が催され，参加者たちは新しい成人名を与えられ祝福を受ける。訓練の終了とともに「ブッシュ・スクール」の建物はすべて燃やされる。以上のように，ワトキンスはバイ族のイニシエーション儀礼(組織)を例に，そこでの青少年に対する訓練の様子を西欧近代の学校教育の概念にそって解釈することで，部族社会における制度化された文化伝達あるいは教育の形式の存在を浮き彫りにした[5]。

イニシエーション儀礼に見出される教育構造や教育的性格については，実は，早くからM.ウェーバーの指摘するところでもあった。教育社会学の潮木はウェーバーの『支配の社会学』(Weber 1962：487－495）によりながら，その合理化論を基軸に前近代から近代にいたる教育構造及び人間形成の基本類型の変動過程について検討している（潮木 1974)。潮木はM.エリアーデのイニシエーション論やウェーバーの支配の類型論を援用しつつ，前近代から近代への教育の構造的変動過程を「カリスマ的教育」と「官僚制的教育」を両極とする教育類型によって捉えようとした。そこでの「官僚制的教育」は，連続的な段階性をもった知識・技術の蓄積過程の様相を示す教育類型として捉えられ，これに先立つ

前近代的教育すなわち「カリスマ的教育」は，非日常的な局面を媒介とし，これを契機に人格の全面的転換，トータルな再生・覚醒という非連続性をそなえた人間の存在様式の転換を実現する教育類型として理念化される。そして，後者の典型的な教育構造をそなえる形態として「未開社会」のイニシエーション儀礼が当てられている。

同じく教育社会学の山本は，現代の学校教育を，ひとつの「限定的意味領域」（シュッツ）と見なすと同時に，細かな象徴や儀式からなる独自的時空間によって生み出された「通過儀礼」として捉えることにより，登校拒否現象などいわゆる異端や亜流の生をその外部に生産し続けるシステムとしての全体像を見いだす(山本　1991)。イリイチのいう今日の学校化された社会における子どもたちの生の様式（＜非在＞の様式）を，その脱学校化論あるいは学校教育の道具化論では捉えきれない現実とみなし，従来のように学校教育をその機能で語るのではなく儀礼として見ていく戦略の有効性が主張される。山本は，先のウェーバーや潮木の観点を援用し，カリスマ的教育（イニシエーション儀礼）と官僚制的教育（現代的学校教育）との間に「聖性／非聖性」,「生の転換／生の非転換」という根元的対立の構図を見いだす。山本によれば現代学校教育にはこの対立が根元的に包含されており，それを首尾よく生きることができなかった場合として登校拒否現象が立ち現れるとする（山本1991：103－106)。ここにもイニシエーションをモデルとして通過儀礼的な視点から学校教育を照射する分析方法を見いだすことができる。

さて，潮木は，イニシエーション儀礼をその典型とする「カリスマ的教育」類型が，ウェーバー的合理化過程としての教育変動の基点に位置づけられると同時に「それは，すでに消滅してしまった過去のものでは到底なく「官僚制的教育」が支配力をおさめたこの近代社会のなかで，現に存在し，たえず再生の機会をうかがっているものだ」(潮木1974：198）とその存続も指摘している。これは現代社会という文脈におけるイニシエーション儀礼の人間形成作用としての潜在力や可能性を示唆する見方につながっている。この点において，フォスターとリトルによりインフォーマル・エデュケーションのひとつの教育プログラムとして開発された「ビジョン・クエスト（Vison Quest Methodology and Dynamics)」は，産業文明社会においてイニシエーション儀礼を教育的な技法として意図的・実践的に利用するひとつの例であろう。非営利的教育組織「S.L.B(the Scool of Lost Border)」を主催するフォスターとリトルは，北アメリカの原住民の伝統的な儀礼慣行としての「ビジョン・クエスト」を米国の青少年のための現代的イニシエーション儀礼としてリメイクし，積極的に教育現場に提供している(Foster & Little 1997(1987))。

ビジョン・クエストは北アメリカの先住民の間に広く分布する大人への成長をうながすための儀礼習俗である。広範な文献資料を渉猟しつつ北米インディアンにおける教育観や教育的習俗について文化相対主義的観点から研究をおこなったペティットによれば，特に，カナダ西部高原地域に居住するトンプソン・インディアンの間で良く発達した習俗形態として知られていた（Pettitt 1946:87)。トンプソン・インディアンの場合，男の子が12歳～16歳になると，成熟と力をもたらす個人的な守護霊を探すための集中的な訓練が開始される。その守護霊はたった一人での冬季の山登りや長期間の巡礼，

孤独な瞑想などの厳しい試練の過程において夢の中に暗示される。その守護霊の存在とその霊格の獲得の確信を持ったことを周囲の大人たちに認められることで成長や大人の節目を達成したとみなされるのだ（Pettitt 1946:90）。

現代社会における青少年の成長過程におけるアイデンティティ葛藤に関しては，マーガレット・ミードの時代から人類学におけるひとつの問題意識として存在していた（ミード　訳書1976（1928））。臨床心理学者でもあるフォスターとリトルは，現代産業社会における子ども・青少年から大人への移行の問題に対して，伝統的なイニシエーション儀礼をモデルにその確かなアイデンティティの移行を支援する方法（Vision Quest methodology and Dynamics）の開発とその実践的な取り組みを行っている[(6)]。

「ビジョン・クエスト」では，プログラムの主体的作成と個別的実践が期待され，高校生の中でも卒業をひかえた3年生が最もふさわしいとされる。指導者から提供される儀礼モデルは汎文化的な基本形式として与えられ，儀礼に付随する具体的シンボルや場所などは，志願者の経験，価値観，信仰などにもとづいて生徒が自分たちで肉付けしていくよう期待される。この「ビジョン・クエスト」は，ヘネップの「通過儀礼」と同じく分離（severance），境界（threshold），帰還（return）という三つの局面で構成されている。

①分離（severance）：プログラムのための準備段階である。「ビジョン・クエスト」に参加することに関しての身近な人々へのアナウンスとその理解を得た後，儀礼や宗教についての社会科学的な学習をし，また厳しい自然環境のなかでの訓練のための安全やサバイバルの技術に関する予備知識を身につける。「ビジョン・クエスト」の一ヶ月前には，絶食状態で日の出から日没まで歩く「メディスン・ウォーク」を大自然の中でおこなう。「メディスン・ウォーク」もやはり北米インディアンの習俗をモデルにしたもので，「ビジョン・クエスト」における境界状態を凝縮した形態である。その過程のなかで得られた自然からの力，霊力，直感あるいはシンボルは，「ビジョン・クエスト」において儀礼を組み立てたり，人生の指針について考える際の材料や参考にする。

②境界（threshold）：いわゆるリミナルな状況であり，「ビジョン・クエスト」のプログラムにおいて最も中心的な期間である。険しい山中など儀礼の中心となる場所を決め，断食をおこないながら感覚をとぎすまし，プログラムに決められたさまざまな儀礼的活動をおこなう。この間，母なる自然との交感のなかで呼びかけや示唆をうけ，それにもとづいて自分に対し大人としての第二の名前をつける。

③帰還（return）：ひとり儀礼の場を去り指導者たちの待つベースキャンプにもどる。そこでまず，儀礼の場から持ち帰った各人のシンボル（木片や小石など），言葉，詩，歌などを他者に手渡し共有するパフォーマンスをおこなう。参加者と共食し身体を洗い衣服を着替える。ベースキャンプを下山するとき，車に乗ったり，買い物や食事をしたり世俗的な生活をあらためて注意深く体感する。自宅へ帰り両親たちと「ビジョン・クエスト」の体験やそこで大人ということに関して感じたり，考えたりしたことを話し合う。

フォスターとリトルによるビジョン・クエストは，現代の青少年たちに，「成長あるいは成熟のた

めの適切な文脈」(growth context) を提供するべく新しく造られたイニシエーション儀礼であり，また「ひとつの学びの形態」でもあるのだ (Foster & Little 1997(1987)80-81)。

3．大きな儀礼：「学校行事」のエスノグラフィー

学校行事に焦点をあてたエスノグラフィックな研究も，学校教育研究におけるひとつの重要な儀礼論の位置を占める。それはまた，先に示した儀礼の類型における「大きな儀礼」に相当する儀礼カテゴリーの分析に主眼を置いた研究でもある。バーネットは1960年代の後期，早くも人類学的な儀礼研究の成果を世俗的な学校教育の現場に導入し，その可能性を明確に示した研究者の一人である (Burnett, 1969)。バーネットはアメリカ郊外地域の普通高校を対象に，そこで繰り広げられる種々の学校行事とそれを支える学生組織のあいだの経済的な相互連関について明らかにした。当時のJ.フィッシャーやM.グラックマンらが都市社会における人類学的儀礼論の適用への批判に対し，かれは儀礼的行為を単に宗教的なものに限定せず日常的で一般的な行為にまで適応するJ.グッディの見解を取り入れることによって，米国の高校生活における学校行事に関するエスノグラフィックな研究の地平を拓いた (Burnett, 1969:1-3)。バーネットは年間行事の進行や生徒の学年（年齢集団）構造を背景に，高校の全体的な儀式のシステムと資金調達のための経済活動のシステムの間の相互連関の事実を参与観察にもとづく方法により明らかにししている。

人類学的研究ではないが，比較教育の野津によるタイの学校行事分析も学校教育におけるエスノグラフィックな儀礼的研究に連なる内容を持つものである (野津 1996)。野津はタイ農村の小学校を舞台に展開する種々の学校行事を，ナショナル・アイデンティティを形成する教育的な儀礼装置として捉えた。タイの小学校における学校行事は，国家統合の要としての仏教および王室に関する象徴によって満たされており，児童にとって行事への参加はこれらの国家象徴を内面化する重要な機会となっている。学校ではタイの人々の精神的な基盤としてある伝統的な仏教信仰にもとづく行事と仏教帰依者の代表としての国王やその一族を顕彰する公的行事が互いに精妙に織り合わされながら，子どもや父母そして農村社会全体を巻き込んで繰り広げられており，それはナショナル・アイデンティティを醸成する主要な機会を提供している。野津によるタイの学校行事の検討は，いうならば儀礼の持つ一種イデオロギー的な知識伝達の仕組みの具体相を比較教育学的な観点から明らかにしようとした試みといえる。

4．学校・教室のエスノグラフィーと「小さな儀礼」

P.マクラーレンによるトロントの労働者階級のカトリック系中学，セント・ライアン校（仮称）のエスノグラフィーは，その学際性とパラダイムの先進性において異彩を放っており，後に続く学校文化の儀礼論的研究に対しても強い影響を与えた (Mclaren,P. 1999(1986))。マクラーレンによれば学校の文化的領域はさまざまな象徴，世界観，エートス，ルート・パラダイムそして反抗の諸形式から構成されるひとつの複雑な儀礼的システムとして捉えられる。マクラーレンはこの儀礼システムとしての学校教育を構成する儀礼を以下のようにカテゴリー化しつつ全体を一連の「教育儀礼」(rituals of

instruction）と見なした。

まず，毎日，個々人のレヴェルで見いだされる「ミクロ儀礼」とクラス・学校単位で見いだされる「マクロ儀礼」のカテゴリーがある。これらは学校文化を構成する独特な時間表象と空間表象にそって毎日のように繰り返される文化的形式であり，いわゆる「通過儀礼」の系列につらなっている。「再活性化儀礼」（rituals of revitalization）は教師同士や管理職との教育モラールをめぐるミーティング，あるいは教師－生徒間での課題達成や問題解決に向けての話し合いなどの集まりの形式に見いだされる。「強化儀礼」（rituals of intensification）は「再活性化儀礼」の下位カテゴリーであり，必ずしも参加者たちの目的や価値の強化を含まず，単に集団的統一のための情緒的な再充填がなされるものである。そして，これら「強化儀礼」および「再活性化儀礼」は，先述のミクロ，マクロな儀礼形式をとって現れる。

「抵抗の儀礼」（rituals of resistance）は支配的権威に対する不従順やその象徴的な転覆を特徴とする微細かつ劇的でもある一連の文化形式である（Mclaren 1999(1986)81-83)。マクラーレンはそこにターナーの「社会劇」（social drama）の過程における第三の局面，すなわち修復と修正へと向かう矯正儀礼としての側面を見いだす。また，これらの「抵抗の儀礼」は生徒による学校権威への意図的な妨害行為をともなう積極的抵抗儀礼と無意識的な妨害行為による消極的抵抗儀礼という二つの形態をともなっている。

教育的な儀礼システムにおいて描かれるセント・ライアン校には「労働者になる」,「カトリックになる」という二つのルート・パラダイムが共在している。両者は学校生活における一連の教育儀礼によって巧妙に関連づけられ，その中で階級や民族をめぐる既存の支配パタンが再生産される過程が分析される。マクラーレンによるセント・ライアン校のエスノグラフィーは，学校における文化的，経済的な再生産とそれへの反抗の象徴的文脈を儀礼論を駆使して描き出した学校文化の新しい説明の様式として高く評価されている（Lankshear 1999)。

一方，クアンツとマゴルダは米国における小学校の朝の集会と都市部の大学（カレッジ）の授業風景との対比的記述をとおして，「大きな儀礼」と「小さな儀礼」の区分を示し，とりわけゴフマンが「相互行為儀礼」（interaction rituals）として概念化した後者の研究意義を強調する（Quantz & Magolda. 1997:222)。また，従来からの儀礼をめぐる定義の乱立状況やイデオロギー的論争を回避し，社会・文化的行為をよりよく理解するための生産的な儀礼の概念化を試みるなかで「形式化された象徴的パフォーマンス」（formalized, symbolic performance）としての操作的定義を採用する（op.cit.226)。彼らは対象となる行為が儀礼であるのか，あるいはそうでないのかという儀礼行為の形態的な捉え方の非生産性を批判し，あらゆる行為に見いだされる儀礼的「側面」へ注目する分析視角を採用する。彼らはこの分析視角を用いて，ある大学の実験教室における物理学の授業を検討し，なにげない授業風景がいかに多様で豊かな儀礼的パフォーマンスによって満たされているかを具体的に提示して見せた。

例えば，教室（実験演習室）の空間構成と学生たちの服装は，カレッジにおいて物理の授業を受けるに相応しいパフォーマンスの舞台と衣装を提供している。また，教師により統制され様式化された質問や学生同士での意見交換の形式は，ひとつの権威の象徴的分配様式として教師（科学者）の教室

内での権威と知識を再生産する。さらに，例えば「くだらぬ質問というものはない」という教師のアナウンスは学生たちの積極的な質問と議論をうながし，カレッジの物理の教室では普通人が「科学する」ことが可能であるし，またそれが期待されているという公的宣言を表明する。この他，教師らしい特徴的なしぐさやふるまい，最初の授業時間，学生同士が互いの隣の学生を全体に紹介する導入儀礼の効果，クラスの難易に関する噂話などが儀礼的側面として指摘される。

クアンツとマゴルダによる行為の儀礼的側面は，学校や教室を共同体の場，支配の場，抵抗の場，あるいは闘争の場として構築するのに一種の非合理性（nonrational）＝儀礼形式が用いられるようなメカニズムであり（op.cit.226），その力を無視することはすなわち学校や教室で展開する日常的な生活世界の真の理解を困難なものにするという。カレッジの学生たちの場合は，その教育的キャリアや成熟度によって，こうした教室の儀礼的諸側面をやすやすと自身のアイデンティティや道徳性へと統合している一方で，例えば，都市部の小中学校の生徒たちの場合，同じ儀礼形式によってそのアイデンティティや道徳意識が脅かされていることを指摘する。クアンツとマゴルダは都市部の小中学校における学業不振やドロップアウトの改善のためには，このような儀礼的側面への注目と考察が重要であることを主張する。

同じく，マゴルダはゴフマンの「相互行為儀礼」の概念を援用することによって，マイアミ大学の新入生のためのキャンパス案内ツアーを分析している（Magolda 2000）。キャンパス案内ツアーは小さな「相互行為儀礼」の集合体として捉えられ，案内者の語りは大学側が新入生に期待する「大学共同体意識」のメッセージを伝達する。案内役の上級生は大学のマニュアルにしたがったツアーを行うなかで，新入生たちに対して建物や施設あるいはその由来などについて説明や大学生活に必要な情報提供をおこなう。案内役の学生の服装や身振り，また語りの形式やその内容についての詳細な検討を通して，このツアー（儀礼）が大学側が作り上げまた維持しようとしている「共同体意識」を象徴的に伝えており，さらに意識するともなくこの大学にとっての「普通であること」の概念やあらかじめその「中心」が前提されたキャンパスにおける「文化的地勢」など伝達している事実を見いだす。

マゴルダは現状を維持する社会的機能としての儀礼というデュルケームの観点と現状の変更をうながす社会過程としての儀礼というターナーの観点をともに採用しながら，儀礼を「形式化された象徴的パフォーマンス」として規定する。さらに，儀礼としての形式化された象徴的パフォーマンスは，我々の感じ方や生き方の形成をうながすという意味でイデオロギーの構成要素として捉えられる（Lankshear 1999 : xiii）。マイアミ大のキャンパスツアーでは，案内役も新入生も共にその役どころを心得た儀礼的パフォーマンスへの参加者を演じている。ツアーでは単に大学生活に必要な道具的知識が伝達されるだけでなく，その場の案内役の身振り，口調の使い分け，大学の歴史や伝説についての語りなどを通して，大学の権威や伝統を尊重させるため期待や道徳性が伝達されていることが指摘される。

マゴルダは「儀礼実践にそなわった政治性やイデオロギー的性格」（McLaren 1999:83-84）を前提に，ツアーにおける様々な相互行為儀礼の過程のなかで構成される「共同体意識」の内容を検討し，ツアーのなかで参加者たちに伝えられる「共同体意識」あるいはそれに基づく「マイアミ大生らしさ」

のなかに大学の中核的価値に沿って編成された政治的な傾向生を指摘する。かれは，マイアミ大学という空間を文化的なヘゲモニー抗争や深刻な社会問題を含み込んだ複雑な場として想定する。マゴルダはキャンパスツアーの儀礼分析をとおして，暗黙的に良きこととして伝えられる大学的「共同体意識」と一方的に標準化された「マイアミ大生」イデオロギー，またそのなかに隠蔽された文化的な多様性や周辺性の排除の力学を明らかにした。

マカダンが取り上げる米国の幼稚園のベテラン女性教師による教室運営の技法も小さな儀礼のひとつと捉えられるかもしれない（McCadden 1997:239-251）。マカダンは米国の幼稚園のフィールドワークから，園児としての規範，モラルが教師と子どもによって構築されるプロセスを，ヘネップやターナーによる通過儀礼論により分析している。そこでベテラン女性教師が教室運営の手法として用いている定型化された所作（身振り，身体的サイン，歌，等）を，ひとつの移行（通過）儀礼と見なし，これによって教室での諸活動における場面の移行や転換，行動の適否の理解がスムーズにうながされることを指摘する。

さらに，マカダンは幼稚園やそこでの諸活動を，ターナーによる通過儀礼のミナルな局面（リミナリティ）として捉え，家庭の生活モラルと幼稚園の生活モラルがネゴシエートされ園児としてのアイデンティティが構築される「場」（リミナル・スペース）と見なした。彼は儀礼論の視点を採用することにより，女性教師にとっては子どもたちを幼稚園生活へ適合させるための手段として概念化されている「定型的な所作や行為（routines）」を，単なる教育技術の実践としてではなく社会的アイデンティティという意味において，子どもが「良い園児になる」ことの学び方の表出として理解しようとした（McCadden 1997:240）[6]。

5．学校における儀礼研究の意義

ここで紹介してきたいくつかの論文は，それぞれ学校教育やその問題への理解あるいは改善に向けた展望をふくんでいる。そこには学校教育を人類学または社会学的な儀礼研究の視角から取り上げることによって得られるであろう学術的な意義と問題解決に向けた可能性が示されている。

「未開社会」のイニシエーション儀礼を「学校概念」への隠喩的おきかえを通して紹介したワトキンスは，これを当時のヨーロッパ（フランス）の教育制度を再考するための材料として用いている。ワトキンスはその論文の最後の部分で，古典的な知識の暗記に偏ったヨーロッパの一部の学校教育を批判し，実践的な生きた知識の学習を実現する「ベリ」や「ボンド」制度の教育効果を高く評価した。素朴な文化相対主義に立脚した文明批判に脱してはいるものの，実証的な資料を根拠に当時の学校中心的教育観の再考をうながすと同時に，人類学と教育学というふたつの学問領域の新しいインターフェイス（教育人類学）に光を投じたことは評価されるべき点といえよう。

山本も学校教育の把握に関して，登校拒否現象を手がかりとして，また通過儀礼論の視点を援用することによって，学校化された社会における子どもたちの生の様式（＜非在＞の様式）を提示した。登校拒否現象を含め子供の様々な異端や亜流をその外部に生産し続ける学校教育というシステムをひとつの全体像として捉えるためには，従来のように学校教育を機能で語るのではなく儀礼として見て

いく戦略の有効性が主張される。こうして，通過儀礼あるいはイニシエーション儀礼論は，一部においては足もとの教育制度の歪みや問題点を効果的に照らし出すための有益な概念装置として採用されている。

以上の研究例においては，いずれも自文化の教育現状の正確な把握とその批判的検討に向けて，主にイニシエーション儀礼の視点が援用されていた。これに対し，フォスターとリトルの場合，イニシエーション儀礼を，単なる教育現象の認識や評価の手段としてではなく，現状の変更をめざす実践的な手段として採用する。そこでは現代の青少年の大人への移行にかかわる問題が儀礼の欠落として単純に説明される側面があるものの，その主たる関心と力点は新しく再構築された儀礼形式の実践的な適用にある。フォスターとリトルによる「新しいイニシエーション儀礼」（ビジョン・クエスト）は，現代社会における「成長のための適切な文脈（growth context)」の欠落を埋めるために計画的，組織的に導入されたひとつの実践的，臨床的な教育技法としての意義を持つ。

ビジョン・クエストにおける移行儀礼としての通過儀礼の視点は，マカダンによる米国幼稚園の研究にも示されていた。しかし，この場合，それは実践する教師自身にとって，単なる教室経営のための具体的な教育的技術として把握されるのみである。教育的な技術の通過儀礼への読み替えは，研究者のエティックな認識にもとづいており，この儀礼論の視点によってその地位や状況の移行を促す道具的性格やアイデンティティ形成に果たす役割が明らかにされる。

現代社会の教育的文脈に生起する儀礼の研究に関しては，まずバーネットによって人類学研究の正当な対象としての先鞭がつけられた。さらに，マクラーレンはその対象のなかに日常的な相互行為的儀礼をふくめることで，学校空間における「小さな儀礼」のもつ重要性を強く認識させた[7]。すなわち，顕在化されにくい日常的な「小さな儀礼」についての視点を取り入れることによって，それらの儀礼がそのパフォーマンスを通して学校生活や教育において重要な「政治的」はたらきをしていることを指摘した。「儀礼が現代的な社会生活のなかで影響力を持ち続けるのは，それが境界づけられ日常生活から切り離されているからではなく，まさに日常の中に組み込まれているからであり」(Quantz & Magolda 1997:228)，同じことは学校生活という文脈においてもいえる[8]。クアンツとマゴルダも大学のなにげない授業中の教室に満ちている多彩な相互儀礼的行為のあり様を具体的に詳述してみせた。そのうえで，大学生は容易に儀礼的行為の諸側面をそのアイデンティティや道徳性に統合しているものの，世代（例えば都市部の小・中学生）によってはうまく統合されずにかえってそれを脅かすように働いている問題を上げ，学校教育における儀礼的側面への注目の重要性を指摘している。

大学のキャンパスツアーを分析した研究において，マゴルダは大学の儀礼的キャンパスツアーを通してある政治的傾向性が埋め込まれた共同体意識がその参加者たちに伝達されている実態を明らかにした。儀礼分析をとおして見出されるのは，米国社会や大学の社会的政治的地勢（sociopolitical terrain）としてのマイノリティやジェンダーをめぐる権力関係，あるいはアカデミックな専門相互間の不透過性などへの問題意識の欠落であり，将来的にはこれらの課題を受けた多文化的で民主的な新しい共同体意識の再構築が目指されるべきことが示唆される。

「小さな儀礼」への着目による学校研究は，儀礼の持つ秩序化とそれによる現実構成の作用を前提

に，学校のなかにおいて展開されている文化政治秩序とその再生産，組織統制のメカニズム，あるいはそれへの抵抗の実践についての象徴的次元を明らかにしようとするものである。そこで共有される儀礼的接近の意義は，毎日，繰り返される無意識的行為として，教育的文脈において強力な作用を有しながらも，研究の対象としても参加者の自覚においても見過ごされている事態を顕在化させるとともに，その成果としての学校文化における象徴的政治的過程に関する理解を現場に還流させることによって，現実の問題解決の手段としても採用していこうとする点にあるといえよう。

注

（1）「大きな儀礼」としては，large, formal ceremony（Quantz & Magolda, 1997:222），grand ritual（Magolda 2000:34），the macro ritual（Mclaren,P. 1999(1986):81）の用語で記述される。一方，「小さな儀礼」は，small rituals（Quantz & Magolda），interaction rituals, minor ceremonies,（Goffman），decorum（Grimes），micro ritual（Mclaren）として言及される。

（2）例えば，尾中文哉 1989「試験の比較社会学―儀礼としての試験―」『思想』№778など参照のこと。

（3）ゴッフマンの「相互行為的儀礼」は，デュルケームによって『宗教生活の原初形態』に示された儀礼論のテーマを現代的な文脈のなかに適用したものである。

（4）小野沢は文化化論（enculturation）の観点から，未開社会のイニシエーション，若者組・若者宿等の慣行を現代の学校教育制度と比較している。そこで，現代的な学校制度における入園や入学が，子どもたちに前期文化化の舞台である家族や親族などの第一次集団（家庭）からの分離および学校文化との出会いの機会をもたらし，学校文化という第二次集団による文化化の機会を提供することを示した（小野沢　1983）。

（5）一方で，ワトキンスは秘密結社における訓練期間全般をして子どもから成人への通過儀礼としても捉えている。ただ，彼の場合，むしろその長期にわたる訓練の内容や形式の側面に注目し，エティックな枠組みをもってこれを定型的教育のカテゴリーのなかに位置づけたといえる。

（6）このプログラムはすでに数十年の長い実績を有しており，高校生を主たる対象に今日の社会が喪失した生きる目標や意義の発見を前提に真の成熟をともなう大人への移行が目指されている。それは人類学，民族学，宗教学などのコースに在学する学生の参加により，その経験をプログラムへとフィードバックさせながら不断の改良がはかられている。（Foster & Little 1997(1987): 80）

（7）ターナーは，その著書においてリミナルな移行期がそなえる教育的な作用について触れている。『儀礼の過程』1976：139－142頁）

（8）武井秀夫は，病院という文脈の中で日常的に展開される医療行為を一連の儀礼的行為として検討している。

参 考 文 献

Burnett, J.H. 1969 Ceremony, Rites, and Economy in the Student System of an American High school, Human Organization, Vol.28, No.1, 1-10.

江渕一公 1982 「教育人類学」『現代の文化人類学２：医療・映像・教育人類学』（祖父江孝男編）至文堂。

デュルケーム 1975 『宗教生活の原初形態』（古野清人訳） 岩波文庫。

Ensign,J. and Quantz,R.A 1997 Introduction, The Urban Review, Vol. 29, No. 4, 217-219.

Foster,S. and Little,M. 1997 The Vision Quest: Passing from Childhood to Adulthood, in Betwixt & Between: Patterns of Masculine and Feminine Initiation, 1997(1987), L.C.Mahdi, S.Foster & M.Little, Open Court Publishing Company.

ヘネップ 1977 『通過儀礼』（綾部恒雄・裕子訳） 弘文堂。

ゴッフマン 1986 『儀礼としての相互行為』（広瀬英彦・安江孝司訳） 法政大学出版会。

Lankshear 1999 Foreword: School as a Ritual Performance, Lawman & Littlefield Publishers, Inc.

Magolda, P.M. 2000 The Campus Tour: Ritual and Community in Higher Education, Anthropology & Education Quarterly, 31(1), 24-46.

McCadden,B.M. 1997 Let's Get Our Houses in Order: The Role of Transitional Rituals in Constructing Moral Kindergartners, The Urban Review, Vol.29, No.4, 239-251.

Mclaren,P. 1999(1986) School as a Ritual Performance: toward a political economy of educational symbols and gestures. Lawman & Littlefield Publishers, Inc.

ミード.M 1976 『サモアの思春期』（畑中幸子・山本真鳥訳） 蒼樹書房。

Musgrove,F. 1982 Education and Anthropology: Other Cultures and the Teacher, John Wiley & Sons.

野津隆志 1996 「タイ農村小学校におけるナショナル・アイデンティティの形成―学校行事の実施とその受容を中心に―」『教育学研究』 第63巻第２号。

尾中文哉 1989 「試験の比較社会学―儀礼としての試験―」『思想』No.778。

小野沢正喜 1983 「「家庭からの分離」と「異文化との出会い」としての入園・入学」『教育と医学』31（4）。

Pettitt,G.A. 1946 Primitive Education in North America, Univ. of California Press.

Quantz,R.A and Magolda, P.M. 1997 Nonrational Classroom Performance : Ritual as an Aspect of Action, The Urban Review, Vol.29, No.4, 221-238.

武井秀夫 1997 「病と儀礼―病院の探検―」『儀礼とパフォーマンス』岩波講座文化人類学，第９巻。

ターナー・V 1976 『儀礼の過程』（富倉光雄訳） 思索社。

1981 『象徴と社会』（梶原景昭訳） 紀伊國屋書店。

潮木守一 1974 「教育における合理化過程」麻生誠編『社会学講座10 教育社会学』東京大学出版

会, 189－204頁。

ウェーバー・M　1962『支配の社会学２』(世良晃志郎訳)　創文社。

Watkins, M.H. 1963　The West African "Bush" School in Spindler,G.D. Education and Culture-Anthropological Approaches, Holt, Rinehart and Winston.

山本雄二　1991「学校教育という儀礼―登校拒否現象をてがかりに―」『教育社会学研究』第49集。

坂 元 一 光

Perspectives on Using Ritual for Analyzing School Education

Ikko Sakamoto

In this paper I review the work of several scholars who have used rituals as a major organizing concept for analyzing educational practices. Through reviewing those works we can see the powerful theoretical influences of outstanding anthropology and sociology scholars such as Emile Durkheim, van Gennep, Victor Turner and Erving Goffman. There are two types of rituals in school life. One type of ritual is large, formal ceremonies, which are separate from everyday school life, e.g. daily morning ceremonies, freshman initiation, graduation, Christmas dances, staff meetings, etc. Another type is smaller ones which are so called interaction rituals (Goffman): little actions between individuals that work to symbolically affirm or challenge the location of the individual in the status quo.

Traditional initiation ceremonies have often been used as a mirror for reconsideration of modern school systems from the viewpoint of cultural relativism. On the other hand, there has been interesting work where traditional initiation ceremonies are introduced into a contemporary educational context as a unique practical educational methodology by modernizing them. School events also seem to play a significant role as a medium for the formation of national identity or student identity in the enculturation process.

Mclaren, Magolda and Quantz suggest that smaller rituals are more important for studying school cultural than larger ones. That is because they are often integrated into social life, including school life, and help shape our perceptions of daily life and how we live. Mclaren opens the way to the small ritual approach for analyzing school culture and we therefor have an alternative account of modern schooling.

The works of Magolda and Quantz draw on the theoretical foundations of Mclaren. Quantz & Magolda suggest that ritual can best be thought of as an aspect of nearly all social action rather than as a categorical type of social act. They make this point by presenting an extended example of very ordinary classroom activities which may appear to be mundane in the extreme, but which present many ritual comments.

Magolda examines the messages that a university transmits to prospective students during one particular ritual, the campus tour, as a collection of interaction rituals, and discusses ways that rituals could be examined and modified to create multicultural and democratic communities.